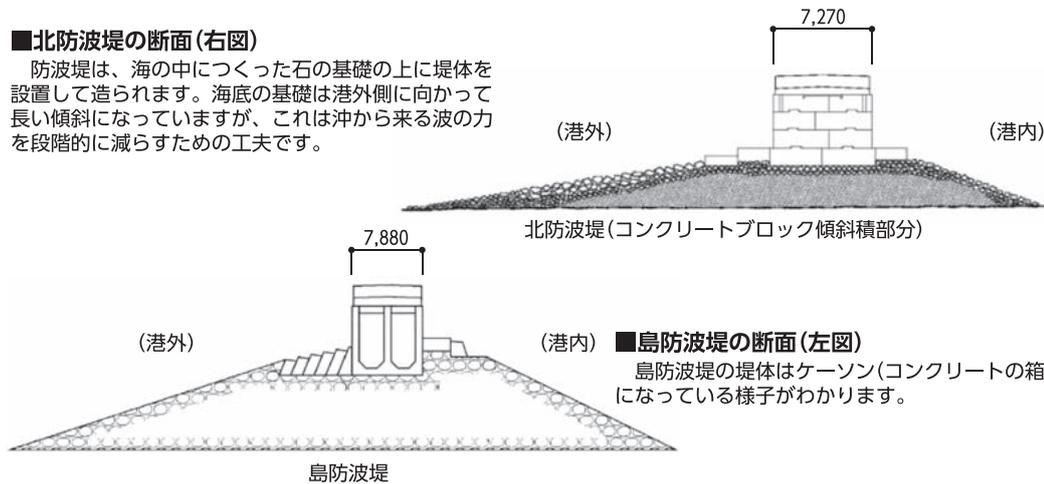


■北防波堤の断面(右図)

防波堤は、海の中につくった石の基礎の上に堤体を設置して造られます。海底の基礎は港外側に向かって長い傾斜になっていますが、これは沖から来る波の力を段階的に減らすための工夫です。



に島防波堤はブロック積からコンクリートの巨大な箱(ケーソン)を海に沈めて建設する工法に変えられて行われました。当時、ケーソンは海上の浮きドックで製作されましたが、伊藤は陸上で製作し、

■島防波堤の断面(左図)

島防波堤の堤体はケーソン(コンクリートの箱)になっている様子がわかります。

防波堤建設までの背景

近代小樽港の歴史は明治2年の手宮海官所(現在の税関のような役所)設置に始まり、その後、北海道の物流拠点として歩を進めましたが、波が海岸に直撃し、船の沈没や棧橋等の破壊をしばしば引き起こすことが問題となっていました。そのような中、明治25年、当時、北海道庁長官だった※北垣国道が防波堤の必要性を時の政府に訴え、これを受けて井上馨内務大臣の小樽視察が明治26年に行われました。その後、明治29年の帝国議会において工事費全額を国費で支出することが決定され、国家プロジェクトとして北防波堤の建設が始まりました。当時、全額国費で港を建設する工事は小樽港が初めての事であり、小樽港にかける

斜路で海中に滑り落とす進水方式を世界で初めて実用化するなど、その後の築港工事に大きな影響を与えました。小樽港で行われた防波堤建設は、築港技術の発展を語るうえで世界的に記念される工事だったと言えます。

4つの重要文化財の意義

旧日本遺産「北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽」は、「民の力」によつて北日本随一の商都となつた物語ですが、まちの基盤として、まず明治13年に小樽に進出した三井銀行など金融機関により資本の流通が促され、明治15年の幌内鉄道の全通や明治18年の日本郵船小樽支店の開業により物流が発展し、これに人々の旺盛な活動が加わつて小樽を大きくしてきました。そして明治30年から始まった防波堤工事の最中に小樽港は国際貿易港に指定され、さらなる発展が約束されました。奇しくも小樽の街の立役者が揃つて重要文化財にその名を連ねたわけですが、このたびの防波堤の重要文化財指定を契機として、重要文化財を活用した小樽の魅力発信を進めていきたいと思ひます。

国の意気込みを感じさせるエピソードです。
※北垣は、坂本龍馬とも交流のあつた幕末の志士で、戊辰戦争後に北海道開拓使に任官し、京都府知事なども歴任しました。静屋通りは北垣の号「静屋(せいおく)」に由来します。

北海道開発局小樽開発建設部

小樽港湾事務所の「みなとの資料コーナー」では防波堤建設に関する資料などが展示されています。

○お問い合わせ先

小樽港湾事務所
小樽市築港2番2号
電話0134-2216131



また、小樽市総合博物館運河館ではトピック展「小樽港防波堤施設―港を築く、港を守る」(小樽市教育委員会と小樽港湾事務所共催)が3月29日(日)まで開催されています。